天狗党の乱とは

❶はじまりは 水戸藩の藩内対立

８代水戸藩主徳川斉脩（なりのぶ）には子がなかったため、水戸藩では次期藩主となる継嗣が問題となっていました。ここから 11 代将軍徳川家斉の子 恒之丞（後の 12 代紀州藩主徳川斉彊（なりかつ））を支持する保守派（後の諸生党）と、７代藩主治紀（はるとし）の子 敬三郎（後の９代藩主斉昭（なりあき））を支持する改革派（天狗党）との間で対立が生まれ、次第に発展していくことになります。

継嗣は斉脩の遺言で敬三郎となり、敬三郎は 9 代藩主斉昭として藩政改革を推し進めました。その結果、斉昭の時代は改革派が重用されて保守派は藩政の中心から遠ざけられることになりました。そして内憂外患の拡大とともに対立は激化し、1860 年（万延元）に斉昭が死去すると両派の対立はいっそう深刻になっていきました。

❷天誅組の乱、生野の変に続く 尊王攘夷派の蜂起

両派の対立が深刻化する中で、改革派の中から尊王攘夷を強硬に主張する一派（激派）が生まれました。そして 1864 年（元治元）３月、ついに同派の首領格 藤田小四郎（尊王攘夷思想に影響を与えた水戸藩士 藤田東湖の子）が、国政上の課題でもあった横浜港鎖港を実現しようと筑波山で挙兵しました。この時の動きは関東に止まり、目的を果たす前に鎮圧されました。

❸京都を目指して西上

大規模な戦闘となった那珂湊（なかみなと）から脱出した天狗党一行は、同じ年の 11 月１日、大子（だいご）村で改革派の家老 武田耕雲斎を将に立てて再び挙兵し、同じく横浜港鎖港を主張していた禁裏御守衛総督 一橋慶喜（斉昭の子）を頼って西上を開始しました。

一行は幕府から「浮浪之徒」と呼ばれて先々で諸藩に行く手を阻まれましたが、行路を変更しながら京都を目指して西上を続けました。そして美濃国から尾張国へ入る手前で進路を北に変え、12 月４日、蠅帽子峠（はえぼし）を越えて越前国に入りました。

❹追討軍の前に降伏

しかし、頼みの綱の慶喜が天狗党追討軍の総大将であることがわかり、包囲の環が迫って行く手もふさがれたため、追討軍による総攻撃直前の 12 月 11 日、天狗党一行 823 名はやむなく降伏の道を選びました。

降伏した 823 名は初め加賀藩に預けられ、丁重な扱いを受けましたが、幕府に引き渡された後は肥料となる鰊粕を貯蔵する蔵に送られ、罪人の扱いを受けることになりました。その内 353 名は形式的な取り調べを受けて斬罪となり、1865 年（慶応元）２月、来迎寺（らいこうじ）境内で刑に処せられました。残る約 470 名も遠島・追放・水戸渡し・寺預け・江戸送りとなり、水戸で始まった天狗党の乱は、距離でいえば終盤にさしかかったところ、敦賀で終息しました。